

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：87111

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770291

研究課題名(和文) 寺院遺構・信仰遺跡からみた脊振山信仰の研究

研究課題名(英文) The research about belief to Mt.Sefuri seen from the temple-site and belief-site

研究代表者

岡寺 良 (Okadera, Ryo)

九州歴史資料館・学芸調査室・研究員(移行)

研究者番号：70543693

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、背振山の山岳信仰を考古学的な証拠を元に、その信仰の実態を明らかにするというものである。本研究における学術的成果としては、背振山系を領域とした山中修行(峰入り)の存在を示した。背振山系における主要霊山の実態解明のデータを提示した。山岳信仰・霊場遺跡としての二丈岳の実態について、経塚の発見により新たなデータを提示した、という3点が挙げられる。

本研究の調査成果については、学会発表、展示、展示図録作成、シンポジウム発表、報告書作成などにより広く公表することができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is the explication about the mountain worship in the Mt.Sefuri. The academic outcomes of this research are the next three items. The first outcome is the evidence of "Mine-iri (峰入り)" on the cordillera of Mt.Sefuri. The second outcome is the presentation of the reality about sacred mountains in the cordillera of Mt.Sefuri. The third outcome is the discovery of "Kyo-Zuka" in the Mt.Nijo.

研究分野：考古学

キーワード：山岳信仰・霊場遺跡 GPS 現地踏査

1. 研究開始当初の背景

九州北部地方には、英彦山・求菩提山・宝満山をはじめとして数多くの山岳信仰に関連する山岳信仰・霊場遺跡が多く所在する。近年それらの重要性が学術的に認識され、求菩提山は国の史跡に指定され、首羅山・英彦山・宝満山は国史跡の指定に向けての行政的な学術調査が進められ、2017年までに全てが国の史跡に指定された。

福岡県と佐賀県の県境に聳える背振山(せぶりさん)は、性空や栄西などの高僧が入山した履歴を持ち、九州北部さらには日本の政権中枢や東アジアとも少なからず関連を持つ、非常に重要な信仰の山であり、この背振山における信仰の実態を解明することは、北部九州ひいては日本における山岳信仰のあり方を解明することにもつながる非常に重要な研究作業である。

その背振山が聳える福岡県と佐賀県との県境は、東西方向に約50kmにもわたって延び、その大半が背振山系の稜線上に位置し、かつては旧筑前国と肥前国との国境をなしていた。

背振山系、特に背振山一帯においては、1974年に川頭芳雄の『脊振山と栄西』(川頭1974)による文献史料を中心とした研究が基礎となり、1980年代には中宮・霊仙寺跡(経塚・墳墓・坊院群・中世石塔類)や、背振山経塚群の発掘調査によって、考古学的な知見も加わり、背振山が山岳信仰の一大拠点であったことは知られていたところであった(東脊振村教育委員会1980・脊振村教育委員会1988)。しかしながら、これらの考古学的な調査や関心は、やはり経塚や墳墓、出土陶磁器や石造物など、寺院のごく一部の属性にとどまっており、寺院境内全体の把握はもとより、背振山、さらには背振山系全体を信仰のエリアととらえ、全体を把握しようという動きにはつながらず、その後、長らく背振山を主要対象とした研究は影を潜めていた。

しかし近年になり、伝承や民俗事例を中心に背振山信仰にアプローチした吉田扶希子の研究(吉田2014)や山本義孝の肥前諸霊山の山岳修験ネットワークの中における背振山上宮の位置づけ(山本2011)など、新たな方法により背振山の山岳信仰を再検討しようという動きが本格化し始めた。



背振山遠景(早良区脇山から)

岡寺もまた、これまでの考古学的な調査を総括した上で上宮東門寺跡の現地調査・報告なども行ったほか(岡寺2014)、2012年8月には「脊振山系の山岳霊場遺跡」をテーマに第二回九州山岳霊場遺跡研究会が福岡県糸島市において開催されるなど(九州山岳霊場遺跡研究会2012)、背振山に関連する諸分野からの研究の盛り上がりを見せ始めてきた。

2. 研究の目的

上記のような調査研究の盛り上がりを見せつつも、これらの調査研究も背振山、あるいは雷山など、山を「点」と捉えた把握であり、背振山の山岳信仰の全貌を知るには背振山系の稜線上の峰々を山岳密教の実践道場として全体を把握する必要があった。その試みは既に山本義孝によって一部実践され始めていたが(山本2011)、背振山系の稜線は直線で約50kmにも及び、山岳信仰に精通した研究者による長期間で複数回にわたる現地調査が必要であり、その達成こそが本研究の目的であった。

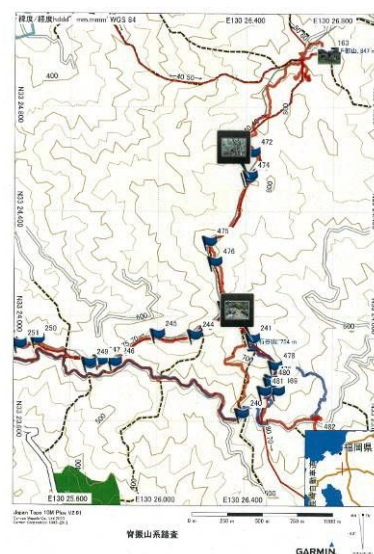
3. 研究の方法

調査方法としては、現地踏査は単に現地を確認するのみではなく、以下の3つの調査方法を特色として取り入れた。

(1)GPS(全地球測位システム)を用いた踏査(第1図)

山中では、平地と異なり、現在地を地図に反映することは困難であるし、数多くチェックする場合、一つ一つ印刷した地図にポイントを落としてメモをとるなど、非常に手間がかかり、誤りを招きかねない。

しかし、GPSを携帯することにより、押さえたい位置を正確に把握するばかりでなく、自らが歩行した軌跡をラインとして記録することができ、入峰道・廻峰ルートへの復元にも有用であった。



第1図 GPSを用いた歩行軌跡の記録の一例

(2) 縄張り・測量調査

この調査方法については、すでに岡寺や山本義孝によって実践されてきた方法である。山中に残された山岳寺院の坊院群の平坦面の平面構造の把握方法として作成したのが縄張り図である。元来、縄張り図は中世山城の城郭遺構の平面構造を把握するため、城郭研究者によって長らく使用されてきた方法であるが、その手法を山岳信仰の研究に応用したものである。具体的には、方位磁針と電子距離計（直射日光の下では巻尺）を用い、1/1,000の縮尺により以降の平面図を作成していくものである。

また、窟や盤座など、1/1,000の縄張り図では、表現しきれない大きさのもの、あるいは立体的な情報が必要なものについては、1/100、あるいは1/50の縮尺により平板測量を行い、平・断面図を作成した。これは一般的な考古遺跡の測量方法と同じであるのでこれ以上は割愛する。

(3) 地名・絵図・地誌類の調査

山岳信仰に関わる遺跡は自然崇拜に基づいた巨岩など、ほとんど人の手が加わっていないものが、盤座や拝所として信仰の対象になる場合が多い。このような場合、現地における調査所見も重要であるが、伝承や地名など、過去の人々の記憶も重要なデータとみなされる。

特に地名には、山岳信仰に関わるものが多く内在しており、それを把握することが非常に重要であると考えた。幸い、今回の調査フィールドが筑前と肥前という国境に位置することから、近世以降に作成された国・郡の絵図・地図が非常に役に立った。特に、近世の国・郡絵図を元に、明治時代初期に、明治政府によって作成された「訂正筑前国郡図」（国立公文書館所蔵）には、境界線上の地名が事細かく掲載されており、現在の地図と重ね合わせることによって、近世と呼ばれていた地名を復元でき、そのいくつかについては、山岳信仰に関わるものであった。

また、対象地域における近世・近代の地誌を総覧し、掲載されている山名や岩の名などを確認し、地名データをさらに肉付けした。

上記のような現地調査については、研究期間中、その回数は38回に上った。



背振山系現地調査の様子（獅子駒岩）

4. 研究成果

(1) 背振山系を領域とした廻峰行の存在

本研究では、西持院文書に記された曼荼羅観、すなわち武蔵寺（福岡県筑紫野市）から背振山頂までを東曼荼羅（胎蔵世界）、背振山頂から雷山を経て、唐津鏡山（佐賀県唐津市）までを西曼荼羅（金剛界）とする金胎両部の曼荼羅観の観念に基づいて国境の稜線を軸に結界設定を行い、そこに入峰する廻峰行が存在したという推測が実証されたことである。

これまでは、背振山、雷山、浮嶽など、主要霊山のみが注目されていたものの、それらに関連性については、ほとんど触れられることはなかった。しかしながら、本研究において、背振山系の稜線上約50kmにもわたる現地踏査をほぼ行い、各所に遥拝所や護摩炉、シャクナゲの群落など、入峰などの山中修行に関わるような遺構を間断なく確認することができた。時期的な問題は残されるものの、山中修行の存在について、より具体性をもって指摘することができたと言えよう。

また、これらの調査成果について、GPS（全球測位システム）を用いることによって、具体的な場所の把握に努めることができ、本報告書にも詳細な位置データを提示することができた。

(2) 背振山系における主要霊山の実態

本研究以前からも、背振山や雷山などの霊山に関連する調査研究の蓄積はあったが、本研究において、より詳細な調査データを蓄積することができた。

背振山においては、東門寺、霊仙寺の筆者も含めたこれまでの調査成果を再提示すると共に、東門寺で採集していた遺物の実測図、写真画像を提示し、東門寺の実像をより具体的に示すことができた。また、背振山に関連する各所に所蔵されている山岳信仰に関連する文化財を調査、報告を行い、経塚や石塔以外にはあまり考古遺物としては関心が払われていなかった背振山に関する調査データを蓄積した。そして、「背振山塚図」の解析から、背振山頂を中心とした登拝路や、東門寺の実態についても成果を得た。

雷山については、「雷山古図」の解析などから、絵図の中に実像と虚像が混在していることを読み取り、また地誌類の細部にわたる記載の検討から、これまで言われてきた「雷山三百坊」の記載が明治時代以降に下ることを確認、「三百坊」の記載自体が、「雷山古図」に描かれた実態の不明なおびただしい数の僧坊群から発想したものではないかと想定した。さらに「雷山古図」のおびただしい数の僧坊群は、地誌などに記載のない坊院名称が大多数であり、現地にも実態が見られないことから、江戸時代の地誌類に記載のある「僧坊十区、修験坊八区」とあるのが、近世以前の雷山の坊院群の実態ではないかと推察するに至った。

このように、従来から注目されていた霊山自体においても本研究において調査成果を積み重ねることができた。

(3) 山岳信仰・霊場遺跡としての二丈岳の実態

本研究での最大の考古学的な調査成果は、やはり二丈岳における山岳信仰・霊場遺跡の実態を明らかにしたことにある。二丈岳は背振山系の主稜線からは外れる位置にあり、また山頂には戦国時代の山城も築かれていたこともあって、山岳信仰・霊場遺跡として認識されてこなかったことは固より、背振山系の山岳信仰と結びつける発想自体がほとんどなかった。

本研究においては、山頂の北側に展開する堂舎・参籠宿などが想定される平坦面群に隣接して、磐座や岩屋に付随する経塚群を確認し、未盗掘の状態において、経塚を発掘調査することができた。集石による納経行為を未盗掘の形で発掘調査した事例は、全国においても数えるほどしかなく、さらにその構造が判明したことによって、英彦山や熊野とも関連性のある構造であることがわかり、二丈岳が背振山系の山中修行において非常に重要な位置を占めていたことが判明した。麓の坊集落や下宮とみられる観音寺跡とも併せて、中世における当地の山岳信仰の実態を明らかにすることができたと言えるのではないだろうか。



二丈岳の経塚検出状況

(4) 地名・地誌記載にみる山岳信仰の痕跡の実態

本研究においては、現地踏査という考古学的な調査に加え、それらを補強するために地名や地誌記載、絵図の解析など、いわゆる考古資料以外の資料も可能な限り把握することに努めた。特に地名については、国境という境界線が現地踏査の主要な場所であったため、国立公文書館所蔵の「訂正筑前国郡図」などには、大字よりも詳細な地名記載がなされていた。それらを読み取り、現地地形図に位置を落とすことで、新たな拜所なども想定することもできた。同様に地誌類にも、磐座であったと推測される岩の記載なども認

められた。ほとんど自然物で構成される磐座のような考古学的な証拠に乏しい山岳信仰に関わる遺構を認識するためには、このような地誌記載や地名、伝承などの解析が、その追認に有効であった。これは一般的な考古遺跡ではほとんど認識されてこなかった調査視点であり、今後、他の山岳信仰・霊場遺跡においても注意すべき視点であると思われる。

本研究では、上記に述べたような背振山の山岳信仰にかかわる考古学的な調査成果を提示することができた。ただ、本研究を遂行するにあたっては、背振山系という広域でつかみどころのない山岳信仰・霊場遺跡について、これまでの研究状況を十分に熟知した上で、研究協力者と共に、いかなる調査方法を行うべきかを熟慮及び試行錯誤を重ねた上で遂行した。

その結果、背振山系という非常に広域な宗教領域を要領よくかつ具体的、詳細に調査できたのではないかと思う。本研究において行った様々な特色ある調査方法についても、他の山岳信仰・霊場遺跡でも有効な手法であり、この調査手法が今後、本例のような遺跡の調査・報告、さらには理解するにあたっての先行事例となれば幸いである。

最後に、これらの成果を報告した学術論文の成果の概要を示しておきたい。

「鉢伏山金剛寺 脊振山系の山岳霊場遺跡の様相」『九州歴史資料館研究論集』39、2014年

鉢伏山金剛寺は、福岡県福岡市西区今宿上ノ原に所在し、清賀上人が開いたとされる怡土郡七ヶ寺の一つで、背振山系北麓の一角を占める山林寺院跡である。現地には、観音堂の他、伽藍あるいは坊院群と考えられる平坦面群、墓地あるいは経塚群と考えられる痕跡、鉢伏岩と称される磐座、中世石塔などが残されていたため、現地の現況平面図、石塔の実測等を行い、報告した。

「肥前国峰入峰と行所の様相」『多良岳と山麓の霊場遺跡』(第六回九州山岳霊場遺跡研究会資料集)、2016年

背振山は中世から近世にかけて行われた肥前国峰の二十八の行所の一つで、胎蔵界の中心として位置づけられていた。ただ、その国峰の行所の様相については不明な部分が多く、また現地調査についても、古い時期にしか行われていない。そのため、現在の研究視点から改めて報告する調査する必要があると考え、その主要なものについて現地確認を行った。概略的な現地調査であったが、金立山や土器山などで祭祀跡と考えられる中世の土師器片の散布や磐座などが見られ、肥前国峰の様相の一端を明らかにした。

「九州における山岳霊場遺跡研究の現状と課題」『七隈史学』第19号、2017年
九州における山岳霊場遺跡研究の現状と

課題について、北部九州の近年の動向を中心に、本研究の調査成果についても報告を行った七隈史学第 18 回大会の発表内容を文章化したものである。

「背振山の山岳信仰 山系所在の寺社信仰遺跡の現地調査から」、『山岳修験』第 59 号、2017 年

本研究の概要について、背振山の山岳信仰の歴史から始まり、今回の調査についての方法、さらには主要な成果を報告した第 39 回日本山岳修験学会の発表内容を文章化したものである。

『背振山の山岳信仰の研究 背振山系山岳信仰・霊場遺跡現地調査報告書』2017 年

本研究の調査内容および成果をすべて報告した報告書である。報告書掲載の項目は以下のとおりである。

研究の目的と方法・経過

背振山系の位置と環境

背振山系山岳信仰・霊場遺跡位置図

背振山系山岳信仰・霊場遺跡一覧

背振山系の主要個別遺構・遺物報告

1 背振山上宮東門寺跡

2 背振山中宮霊仙寺跡

3 背振山系稜線上で確認された磐座・石鉢・修法壇・窟等について

4 背振山系山岳信仰・霊場遺跡関連考古資料

二丈岳山岳信仰・霊場遺跡調査報告

1 二丈岳の概要と調査の経緯・経過

2 二丈岳山頂および北側平坦面群

3 山頂北側の磐座・経塚と「穴観音」の岩屋と経塚

4 観音寺跡（観音屋敷）

5 まとめ

背振山系山岳霊場関連資料

1 「背振山」銘銅製経筒

2 佐賀県神埼市千代田町嘉納丙太田区彦山社伝来の銅製懸仏

3 大悲王院所蔵の雷山古図

背振山系山岳信仰・霊場遺跡の諸相

1 背振山の山岳信仰 山系所在の寺社信仰遺跡の現地調査から

2 「背振山界図」に描かれた山岳霊場としての背振山

3 雷山の峰尾参り

総括

< 引用文献 >

岡寺 良、寺院遺構からみた背振山上宮・東門寺跡と中宮・霊仙寺跡の研究、財団法人鍋島報効会研究助成報告書、第 6 号、2014

川頭芳雄、脊振山と栄西・大潮と売茶翁、佐賀県郷土史物語、第 1 輯、1974、954
九州山岳霊場遺跡研究会、第 2 回九州山岳霊場遺跡研究会 脊振山系の山岳霊場遺跡 脊振山・雷山・怡土七ヶ寺 資料集、2012

脊振村教育委員会、脊振山経塚群 脊振山上宮所在経塚・墳墓群、脊振村文化財調査報告書、第 1 集、1988

東脊振村教育委員会、霊仙寺跡、東脊振村文化財調査報告書、第 4 集、1980

山本義孝、背振山系を中心とする山岳信仰遺跡の再検討、日本山岳修験学会聖護院学術大会発表資料、2011

田扶希子、脊振山信仰の源流、中国書店 2014、320

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

岡寺 良「鉢伏山金剛寺 脊振山系の山岳霊場遺跡の一樣相」、『九州歴史資料館研究論集』39、査読有、2014、55-64

岡寺 良「肥前国峰入峰と行所の様相」、『多良岳と山麓の霊場遺跡』(第六回九州山岳霊場遺跡研究会資料集) 査読無、2016、153-170

岡寺 良「九州における山岳霊場遺跡研究の現状と課題」、『七隈史学』第 19 号、査読有 2017、360-374

岡寺 良「背振山の山岳信仰 山系所在の寺社信仰遺跡の現地調査から」、『山岳修験』第 59 号、査読有、2017 (発行予定) 頁未定

〔学会発表〕(計 3 件)

岡寺 良「脊振山の山岳信仰 山系所在の寺社・信仰遺跡の現地調査から」第 36 回日本山岳修験学会高尾山学術大会、於：八王子市芸術文化会館「いちようホール」大ホール、2015

岡寺 良「国境の山岳信仰 脊振山系の信仰・霊場遺跡の現地調査から」伊都学(第 8 回)ミニシンポジウム「国境の山岳信仰 脊振山系の聖地・霊場を巡る」、於：糸島市立伊都国歴史博物館、2016

岡寺 良「九州における山岳霊場遺跡研究の現状と課題」七隈史学会第 18 回大会、於：福岡大学文系センター棟、2016

〔図書〕(計 2 件)

岡寺 良、山本義孝、中牟田寛也、井形進『国境の山岳信仰 脊振山系の聖地・霊場を巡る』伊都国歴史博物館・九州歴史資料館共同開催特別展、2016、48

岡寺 良、山本義孝、井形進、小林啓、吉田扶希子『背振山の山岳信仰の研究 背振山系山岳信仰・霊場遺跡現地調査報告書』九州歴史資料館、2017、154

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡寺 良 (Okadera, Ryo)

九州歴史資料館・学芸調査室・研究員

研究者番号：7 0 5 4 3 6 9 3

(2)研究協力者

山本義孝 (Yamamoto, Yoshitaka)

吉田扶希子 (Yoshida, Fukiko)

藤岡英礼 (Fujioka, Hidenori)